OS6-6 聴神経腫瘍に対するガンマナイフ再治療

Shoji Yomo[1, 2]、Yasser Arkha[1]、Pierre-Hugue Roche[1]、Jean-Marc Thomassin[1]、Jean Regis[1]
Department of Neurosurgery, Timone University Hospital[1]、埼玉ガンマナイフセンター[2]

目的：聴神経腫瘍に対するガンマナイフ治療は低侵襲治療として確立されてきた。しかし腫瘍の継続的増大（治療失敗）例では摘出術が標準的治療となっており、ガンマナイフによる再治療の役割は不明である。本研究の目的は治療失敗例におけるガンマナイフ再治療が有効であるかどうか、また残存している神経機能の温存が可能であるかを検討することである。
方法：2007年末までに1951例の聴神経腫瘍に治療が行われ、48例で再治療が必要であった。そのうち15例でガンマナイフ再治療が行われ、2年以上の追跡期間を持つ8例を対象とした。初回から再治療までの期間は46ヶ月（中央値）、再照射後の追跡期間は64ヶ月（中央値）であった。腫瘍容積はそれぞれ0.51mLおよび1.28mL（中央値）で、辺縁線量はいずれも12Gy（中央値）であった。
結果：6例で腫瘍縮小が確認され、そのうち1例は初回治療時よりも縮小した。残り2例では腫瘍増大の停止が確認された。再治療時に有効聴力のあった3例中1例のみで有効聴力が保持されていた。顔面神経麻痺やその他の合併症は見られなかった。
結論：聴神経腫瘍治療失敗例において、とりわけ比較的小さな腫瘍に対する比較的低線量でのガンマナイフ再治療は有効で安全な治療であることが示された。